



研究していること

私の専門は西洋史、特にイギリス近代の思想史、文化史ということになります。具体的な研究テーマは十九世紀のイギリスで活躍したウィリアム・モリスという人物の思想をその社会性、時代性と合わせつつ考察する事です。彼は工芸・芸術界の巨匠であるだけでなく、その詩や物語も高く評価される人物です。日本でも人気の彼のデザインは、たとえそれと知らずとも、おそらくは眼にした事があるのではないかと思います。そのように成功していた工芸・芸術家であるモリスは40歳を過ぎて本格的に政治活動を始め、後には社会主義者であることを公にするに至ります。私の興味関心はその彼の芸術と社会とを結びつけつつ考察するその理論であり、美や芸術を蘇らそうとするその方法論であり、また社会とそこに住む個人との関係性を再構築しようとするその思想の有り様です。モリスのそうした思想的側面を時代性や現代性をも踏まえつつ考察していきたいと考えています。こう語ってみるとなにより小難しく感じるかもしれませんが、単純にモリスのデザインを見てもらえれば、その美しさを分かっただけだと思いますし、その美しさを残したいと考えたモリスの意図をくみ取ることができるのではないかと思います。

皆さんに読んでもらいたい本

気に入った本と出会うことはとても素晴らしい経験だと思います。だからこそ、本当は自分でその出会いを経験して行ってほしいと思いますが、こうした文章もひとつの本との出会いのきっかけだということで、プリーモ・レーヴィの一連の著作(『アウシュヴィッツは終わらない -あるイタリア人生存者の考察-』、『溺れるものと救われるもの』等)を挙げたいと思います。とても素晴らしい本だし、とても怖い本だし、とても悲しい本だと思います。作者はアウシュヴィッツの収容所から生還したユダヤ系イタリア人です。彼はその強制収容所での体験を淡々と描き出していきます。強制収容所の体験を生き残り、そしてそのことを経験として描いたレーヴィは、けれども戦後40年以上も経ってから自殺した、とされています。人間のあり方を根本的なところから考えざるを得ないホロコーストというものを知ってしまった私たちは、彼の著作にじっくりと向き合う必要があるのではないのでしょうか。

個人的に好きなこと

旅が好きで、特に冬の北海道が好きでよく行きます。旅先ではスノーシューをしたりすることもあります。基本的には一カ所の宿でゆったりと過ごして、時に旅人宿みたいところで同じ宿に宿泊した北海道好きの人たちと交流して、情報交換するのも楽しみです。最近では、自分の学生時代、特に1980年代から90年代前半に聴いていた音楽(ジャンルはポップスからハードロック、クラシックまで何でもありです)を引っ張り出してきてよく聴いています。